

長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響

蓬田 高正*・飯田 稔・井村 仁・関 智子**・岡村 泰斗***

Effect of two-week camp on intrinsic motivation of elementary school children

YOMOGITA Takamasa*, IIDA Minoru, IMURA Hitoshi
SEKI Tomoko**, OKAMURA Taito***

The purpose of this study was to examine the effect of two-week camp on intrinsic motivation. The subjects were a total of 53 elementary school children in two experimental groups (N=27 and N=26) ranged 5 to 6 grade who participated in two-week camps and 49 same grade school children in the comparative group who did not. To measure intrinsic motivation, three scales were used : Children's Perceived Competence Scale developed by Sakurai, Children's Self-Determination Scale developed by the author and Children's Acceptance by Significant Others Scale developed by Takano et al. They were administered before, after and one month after the camp. The following results were obtained : 1) Two experimental groups showed significantly greater progress in both Perceived Competence and Acceptance by Significant Others than the comparative group. 2) One experimental group showed significantly greater progress in Self-Determination than the comparative group, although another experimental group did not.

Key words: two-week camp, elementary school children, intrinsic motivation

1. 序 論

中央教育審議会¹⁾は、新しい時代を拓く心を育てるために「生きる力」を育成する教育方針を掲げた。「生きる力」とは、1) 自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考える力、2) 豊かな人間性、3) 健康や体力である¹⁾。その背景には、現在の子供たちを取り巻く家庭や学校、地域社会の様々な教育上の問題の増加が挙げられる。

桜井³⁾は、無気力の子供たちが多い現代で、子供たちが生き生きと学べるようにするためには、幼い頃から自ら学ぶ意欲を育むことが重要であるとし、自ら学ぶ意欲を内発的な動機づけとしてとらえ、その発現プロセスを示した。その中で、内

発的動機づけの源として、有能感・自己決定感・他者受容感の重要性を述べている。

キャンプを主とした自然体験は、多くの教育的効果が期待できる。そのような中、中央教育審議会¹⁾は、「生きる力」を育むための一つとして、異年齢集団の中で子どもたちに豊かで多彩な体験の機会を与えることを挙げ、長期の自然体験の振興を提言している。

本研究では内発的動機づけを有能感、自己決定感、他者受容感として捉え、長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

そこで、本研究の目的を検証するために以下の

* 独立行政法人国立青年の家（元筑波大学体育センター準研究員） Independent Administrative Institution National Youth Houses

** 青森大学 Aomori University

*** 奈良教育大学 Nara University of Education

仮説を設けた。

仮説：長期自然体験に参加した児童は、参加しなかった児童より有能感・自己決定感・他者受容感が向上するだろう。

2. 研究方法

2.1. 被験者

1999年度国立妙高少年自然の家主催の妙高キッズアドベンチャー「信越未知の旅・遊悠」に参加した小学校5・6年生（以下、妙高キッズアドベンチャーという）計27名、及び1999年度文部省委嘱事業さしま子ども村実行委員会主催の「さしま子ども村」に参加した小学校5・6年生（以下、さしま子ども村という）計26名を経験群とした。対照群は、自然体験に参加していない福島県内の公立小学校の5・6年生計49名である。

表1. 被験者の内訳

	妙高			さしま			対照群		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
5年	10	8	18	7	9	16	8	14	22
6年	6	3	9	6	4	10	16	11	27
合計	16	11	27	13	13	26	24	25	49

2.2. 長期自然体験の概要

2.2.1. 妙高キッズアドベンチャー

1999年7月28日から8月11日（14泊15日）に国立妙高少年自然の家及びその周辺で実施された。プロジェクトアドベンチャーや縦走登山、チャレンジプログラムなどのアドベンチャー・プログラムに、自然環境学習などの環境教育プログラム、農業体験や民泊といった体験学習から構成されている。

2.2.2. さしま子ども村

1999年7月24日から8月6日（13泊14日）に茨城県立さしま少年自然の家及びその周辺で実施された。登山や沢歩きなどのプログラムに、自然探訪やクリーン作戦などの環境教育プログラム、農業体験や老人ホーム訪問といった体験学習から構成されている。

2.3. 検査

児童の内発的動機づけを測定するために、桜井⁴⁾の児童用コンピテンス尺度の下位尺度「自己価値」（10項目、得点範囲は10-40）、桜井⁵⁾の大学生用の自己決定感尺度を児童用に修正した児童用自己決定感尺度（6項目、得点範囲は6-24）、高野

ら⁸⁾の児童用他者受容感尺度（10項目、得点範囲は10-40）を用いた。すべて高得点ほど、有能感、自己決定感、他者受容感が高いことを意味する。また、補足資料を得るために筆者が独自に作成した質問紙を用いた。これは長期自然体験に対して、どの程度うまくできたかを5段階で評定してもらった。

2.4. 検査の手続き

経験群には有能感尺度、自己決定感尺度、他者受容感尺度をPre（長期自然体験直前）、Post1（長期自然体験直後）、Post2（長期自然体験終了1ヶ月後）の3回実施した。対照群には有能感尺度、自己決定感尺度、他者受容感尺度をPre、Post2の2回実施した。

3. 結果と考察

3.1. 有能感の変化

表2に三群の有能感得点の平均得点と標準偏差を示した。

表2. 有能感得点の平均と標準偏差

	妙高(N=27)		さしま(N=26)		対照群(N=49)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
Pre	26.00	5.33	27.62	6.17	23.75	5.75
Post1	28.44	5.50	30.15	5.30	-	-
Post2	29.33	5.03	30.31	5.47	22.85	5.26

三群の得点変化を検討するため、群と測定時期を要因とする3×2の分散分析を行った結果、妙高（ $F(1,99) = 23.75, p < .01$ ）とさしま（ $F(1,99) = 15.50, p < .01$ ）の測定時期に有意差がみられた（ $MSe = 7.30$ ）。また、Preにおいて、群間に有意差が見られたため、Preの有能感得点を共変量として、共分散分析で三群のPost2を比較した結果、さしまと妙高が対照群より有意に高かった（ $F(2,98) = 23.89, p < .01, MSe = 11.67$ ）。

経験群の得点変化を検討するため、測定時期を要因とする一要因の分散分析を行った結果、妙高・さしま共にPreとPost1、PreとPost2の間に有意差がみられた（妙高： $MSe = 7.03$ 、さしま： $MSe = 8.10$ ）。

有能感が向上した要因として、成功体験の蓄積と体験学習が挙げられる。桜井³⁾は有能感を育てるには成功経験と体験学習を多く持つことが重要であるとしている。長期自然体験自己評価調査において、妙高は74.1%の児童が、さしまは76.9%

の児童が長期自然体験の活動はうまくできたと認識していた。また、長期自然体験中の体験学習により対象への興味が喚起され、より深い理解が喜びをもたらし、有能感が高まったと思われる。

関ら⁷⁾はプログラムが思い通りに遂行できたことによって、達成動機の向上に影響が及んでしまうことを明らかにした。本研究における二つの長期自然体験は、天候に恵まれ順調に予定されたプログラムを消化することができた。このように順調にプログラムを消化できたことが参加者の自信となって有能感が向上したのと思われる。

3.2. 自己決定感の変化

表3に三群の自己決定感得点の平均得点と標準偏差を示した。

表3. 自己決定感得点の平均と標準偏差

	妙高(N=27)		さしま(N=26)		対照群(N=49)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
Pre	16.44	3.34	15.96	4.00	15.86	2.44
Post1	16.48	2.61	17.62	2.59	-	-
Post2	16.69	2.99	17.54	2.98	15.63	2.56

三群の得点変化を検討するため、群と測定時期を要因とする3×2の分散分析を行った結果、さしま (F (1,99) =11.78, p<.01) の測定時期に有意差がみられた。また、Post2において、さしまと妙高が対照群より有意に高かった (MSe=3.31)。

経験群の得点変化を検討するため、測定時期を要因とする一要因の分散分析を行った結果、さしまにおいて、PreとPost1、PreとPost2の間に有意差がみられた (MSe=4.16)。

さしまにおいて自己決定感が向上した要因として、自律心の向上が挙げられる。さしまでは、特に日常生活において、自主性・自立性の育成を目標とした指導が行われ、報告書の中においてその効果があったという記述がみられた⁶⁾。長期自然体験において、自己や他者との関わりの中で自律心が育ち、次第に自分のことは自分で決定し、自分でやっていきたいと思うようになる。このような自律性援助の指導の効果が表れ、児童の自律心がつき自己決定感が向上したのと考えられる。

3.3. 他者受容感の変化

表4に三群の他者受容感得点の平均得点と標準偏差を示した。

三群の得点変化を検討するため、群と測定時期を要因とする3×2の分散分析を行った結果、妙

表4. 他者受容感得点の平均と標準偏差

	妙高(N=27)		さしま(N=26)		対照群(N=49)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
Pre	29.63	6.11	30.92	5.82	27.93	3.89
Post1	31.56	6.11	33.31	4.76	-	-
Post2	30.93	5.66	34.12	4.29	27.47	4.09

高 (F (1,99) =2.98, p<.10) の測定時期に有意傾向、さしま (F (1,99) =18.08, p<.01) の測定時期に有意差がみられた (MSe=8.86)。また、Preにおいて群間に有意差が見られたため、Preの他者受容感得点を共変量として、共分散分析で三群のPost2を比較した結果、さしま、妙高、対照群の順に有意に高かった F (2,98) =15.58, p<.01, MSe=13.03)。

経験群の得点変化を検討するため、測定時期を要因とする一要因の分散分析を行った結果、妙高はPreとPost1、さしまはPreとPost1、PreとPost2の間に有意差がみられた (妙高:MSe=9.29, さしま:MSe=11.40)。

他者受容感が向上した要因として、凝集性が高まったことが挙げられる。他者受容感と凝集性に関してDurall²⁾は、凝集性は帰属意識や帰属に対する欲求であり、その中には他者受容感も含まれるとし、キャンプでの様々な活動や体験は凝集性を高めるとしている。

長期自然体験は、小集団で活動が行われた。そのような中で、言語的・身体的相互作用の結果として、仲間との相互理解が深まり、集団としての凝集性を高め、メンバーに対する好意の感情が生じ、他者受容感が高まったのと思われる。

4. 結論

本研究では、以下のことが明らかになった。

- 1) 長期自然体験に参加した児童は、長期自然体験に参加していない児童と比較して、有能感及び他者受容感が長期自然体験期間中に向上した。
- 2) さしま子ども村に参加した児童は、長期自然体験に参加していない児童と比較して、自己決定感が長期自然体験期間中に向上した。しかし、妙高キッズアドベンチャー「信越未知の旅・遊悠」に参加した児童の自己決定感に向上はみられなかった。

引用文献

- 1) 中央教育審議会 (1998) : 新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機一, 文部省.
- 2) Durall JK (1997) : Curative factors in the camp experience : Promoting developmental growth. *Camping Magazine*, 70 (1) : 25-27
- 3) 桜井茂男 (1997) : 学習意欲の心理学—自ら学ぶ子どもを育てる—. 誠信書房, 東京.
- 4) 桜井茂男 (1992) : 小学校高学年生における自己意識の検討. *実験社会心理学研究*, 32:85-94.
- 5) 桜井茂男 (1993) : 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み. *奈良教育大学教育研究所紀要*, 29 : 203-208.
- 6) さしま子ども村実行委員会 (1999) : 平成11年度文部省委嘱事業「子ども長期自然体験村」. 茨城県立さしま少年自然の家, 茨城.
- 7) 関智子・飯田稔・岡村泰斗・黒澤毅 (1999) : 長期・短期自然体験が参加者の達成動機に及ぼす効果の比較. *日本レジャーレクリエーション学会第29回大会研究発表論文集*, p 94-97.
- 8) 高野清純・海保博之・桜井茂男・岡島京子・渡辺弥生 (1992) : POEM—生徒理解カード. 図書文化, 東京.